

主催者挨拶

古河市教育委員会
教育長 吉田 浩康

かつて、大正から昭和にかけて、児童文学が大いに興隆した時代がありました。「絵本黄金時代」と呼ばれ、多くの子ども向け雑誌が発刊されましたが、中でも大正11年に古河出身の名編集者・鷹見久太郎によって創刊された『コドモノクニ』は、文学と美術、音楽を融合し、さらに幼児教育への配慮も充分なされた、大変、画期的な絵雑誌でした。しかも当代一流の詩人・画家たちによって描かれた誌面は絢爛豪華、まさに「児童文学の金字塔」といえます。

その『コドモノクニ』と後継誌『コドモノテンチ』両誌の原画を活用し、現代にあらたな児童文学のうねりを興そうという趣旨で始まった公募企画が「1ページの絵本」です。

平成20年の国民文化祭をきっかけに始まった本企画も、早いもので18回目を迎えることとなりました。奇しくも鷹見久太郎の生誕150年にあたる本年は、全国各地から小中学生の部に5,707点、一般の部に417点と、大変多くのご応募をいただきました。ご応募くださいましたすべての皆様、また、授業や課題等で取り組んでくださいました学校関係者の皆様に感謝申し上げますとともに、入賞された皆様には心よりお祝いを申し上げます。

さて、私たちのまち古河は、日本最古の歌集『万葉集』にその名が刻まれて以来、長い歴史を積み重ねながら、多くの文学者・芸術家・文化人を輩出してきた「歴史・文化・芸術のまち」であります。そんな古河に生まれた鷹見久太郎は『コドモノクニ』の創刊に際し、「情緒を育み、五感のすべてに訴えかけて心身の健やかな成長を促す」という編集方針を掲げ、子どもたちが真の芸術作品に触れられるような雑誌作りを目指しました。

グローバル化・IT化が進み、チャットGPTに代表される人工知能（AI）が著しく発達した現代は、生活の様々な場面で便利になった一方、ともすれば、思考力や理解力が奪われ、人間性が喪失されかねないという不安もはらんでいます。

そうした不安を払拭し、人間らしく生きていくためには、豊かな情緒、自由な発想力、自分の言葉で表現する力、相手と共感できる力などが不可欠となります。そうしたものを養うものが文化・芸術であり、真の文化・芸術に触れ、かつ、自らもあらたな創作を行うということが重要なのではないのでしょうか。

「1ページの絵本」は真の芸術に触れるとともに、あらたな文化・芸術を生み出す、そんな企画でありたいと考えております。今後とも皆様の温かいご支援・ご協力を賜れば幸いです。

最後になりますが、審査の労をお取りくださった選考委員の諸先生をはじめ、ご協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。